

## 高齢者虐待に対する地域包括支援センター看護職の 支援行動指標の有用性・実用可能性の検証

上 原 たみ子 (千葉大学大学院看護学研究科 研究生)  
吉 本 照 子 (千葉大学大学院看護学研究科)  
杉 田 由加里 (文部科学省 高等教育局医学教育課)  
飯 野 理 恵 (千葉大学大学院看護学研究科)

**目的:**「高齢者虐待に対する地域包括支援センター（センター）看護職の支援行動指標（指標）」の有用性と実用可能性を検証する。

**方法:**3センターの初任期看護職3人が指標を2ヶ月間試用し、試用後に半構造化面接調査を行った。その結果をもとに有用性を虐待対応の改善、実用可能性を活用に伴う負担感の有無により検証した。また、センター長（看護職1人、他職種2人）による評価を得た。

**結果:**初任期看護職全員が、指標の示す「支援対象者」をもとに高齢者と養護者のみへの支援であったことに気づき、多様な支援対象者に対する支援の必要性と地域ケア力向上への支援が課題であると認識した。看護職のセンター長は、多様な支援対象者への働きかけや事例の全体像の把握等、初任期看護職の虐待対応の改善を認め、他職種のセンター長1名は、看護職に養護者や家族を支援する役割があることを理解した。また、初任期看護職は状況に応じて「支援行動の意図」や「支援行動例」を選択し活用し、全員が負担なく活用でき、自身の課題解決に向けて継続的に活用する意向を示した。

**考察:**初任期看護職が高齢者と養護者のみならず多様な支援者への働きかけを習得した等、センターの看護職の役割と支援行動を理解し高齢者虐待防止に関する対応を改善したこと、さらに他職種による看護職の役割の理解が深化したことから本指標はセンターの高齢者虐待に対する看護職および協働による組織的対応の改善に有用と考える。また、自身の課題解決に向けて「支援行動の意図」と「支援行動例」を選択して活用できることが実用可能性を高めたと考える。

**KEY WORDS:** elder abuse, community health nurses, action indicator

### I. はじめに

高齢者虐待（以下、虐待）への対応の中心的役割を担う地域包括支援センター<sup>1)</sup>（以下、センター）の設置数は増加しており<sup>2)</sup>、虐待件数も増加傾向にある<sup>3)</sup>。センターは経験の浅い職員が多く<sup>4)</sup>、虐待対応における技術不足や困難感を感じ<sup>5)・6)</sup>、「センター保健師あるいは看護師（以下、看護職）」は専門性の発揮が十分でないと認識している<sup>7)</sup>。これらから、初任期看護職をはじめ看護職は虐待対応における自身の役割を認識し、役割遂行する力量を高める必要がある。センターにおける虐待対応の根拠となる虐待対応のマニュアル等<sup>8)~10)</sup>（以下、マニュアル）は高齢者の生命、身体の安全の確保等を中心に示している。しかし、高齢者虐待の防止、高齢者の養護者に対する支援等に関する法律（以下、法）の理念

に含まれる養護者支援や地域ケア力の向上に向けた支援の記載は十分とはいえない。

そこで、研究者らは、経験によらず看護職が法の理念に示された養護者支援及び地域ケア向上に向けた支援を含めた支援行動指標（以下、指標）を開発した<sup>11)</sup>（表1）。指標は、看護職の役割を示す「常に意識すること」5項目、役割遂行のための「支援行動の意図」18項目、「支援行動例」144項目で構成され、虐待対応において多様な支援対象者への働きかけが必要なため、「支援行動例」を支援対象者別に示した。本指標の内容妥当性は、高齢者虐待防止に関し豊富な経験を有する熟練保健師と研究業績を有する研究者による専門家会議で、実行可能性は中堅看護職による専門家会議で検証した<sup>11)</sup>。ついで、本指標の開発のねらいに即して、初任期看護職が実践場面で活用し虐待対応を改善できることを検証する必要がある。そこで、本研究の目的は、本指標の有用性と実用可能性の検証とした。

表1 虐待に対するセンター看護職の指標（一部抜粋）

常に意識すること	支援行動の意図
1. 的確に緊急性を判断し、高齢者の生命の危機を回避する	1-1. 今ある情報を駆使して、即時に緊急性を見極める
	1-2. 高齢者・養護者・家族成員に関する情報を多角的に整える
	1-3. 虐待行為の発生・悪化を見逃さず、高齢者の安全を確保する
2. 高齢者・養護者・家族成員の意向や権利が尊重かつ擁護される家族関係を見極める	2-1. 高齢者・養護者・家族成員それぞれの現状認識、意向、支援ニーズ、侵害されている権利を明らかにする
	2-2. 虐待誘因・要因を推測し、家族の課題を明らかにする
	2-3. 虐待の改善可能性を探索し、構築可能な家族関係を予測する
3. 支援者の力量形成を図りながら、高齢者・養護者・家族成員・支援チームと共に新たな家族関係の構築を目指す	3-1. 家族成員・支援者・地域のケア力や力量を見極め、最善の支援チームメンバーを決定する
	3-2. 高齢者・養護者・家族成員・支援チームと共に、それぞれの能力や力を最大限に活かし、かつ、根拠に基づいた支援方針を決定する
	3-3. 看護職自身が高齢者・養護者・家族成員と関係性をつくりながら介入する
	3-4. 高齢者・養護者・家族成員・支援チームと共に支援効果を評価し、支援方針を調整する
	3-5. 支援チームで不足している知識・技術・資源と支援者の疲弊感・困難感を明らかにし、補完強化する方策を探索する
	3-6. 看護職自身が担ってきた役割や行っている支援を、高齢者・養護者・家族成員の様子、支援の状況、支援チーム・支援者・地域の社会資源の力量を判断して移行する
4. 看護職自身が虐待事例に的確に対応できる条件を整える	4-1. 事例の緊急性や看護職の支援困難感に応じて、看護職自身が支援を受けられる体制を確保する
	4-2. 他職種・他機関に看護職及び看護専門職の役割・専門性を示す
	4-3. 看護職自身の支援技術の向上を図る
5. 高齢者虐待の予防・早期発見・早期対応・再発防止にむけた地域のケア力の向上を図る	5-1. 高齢者を含む地域住民・関係機関に、高齢者虐待予防に必要な知識・技術の習得を促す
	5-2. 地域包括支援センターと連携しうる地域住民や関係機関を確保する
	5-3. 地域包括支援センター職員・地域住民・関係機関と共に地域の課題を明らかにし、課題を解決する方策を探索する

\* 指標の「常に意識すること」、「支援行動の意図」を抜粋

## II. 用語の定義

- ・虐待：法に規定されている養護者による虐待
- ・支援行動：意図に導かれた思考等を含む援助行為
- ・初任期看護職：虐待への対応経験が3年未満の看護職

## III. 研究方法

### 1. 研究協力機関及び研究協力者

研究協力機関及び研究協力者の選定条件は、センターの設置主体、保健師の資格の有無等により支援内容や困難感等が異なること<sup>7), 12), 13)</sup>から直営と委託それぞれのセンターを含め、初任期看護職には保健師資格の有無、それぞれを含むようにした。また、研究協力者には、初

任期看護職とともに、指標を試用することで、支援対象者が最善の支援を受けられない等の不利益を被っていないかを確認し、不利益の発生を防ぐとともに、支援過程及び結果をより客観的に評価するために初任期看護職を指導する立場にいるセンター長とした。したがって、研究協力者は、初任期看護職とセンター長の2人1組とした。さらに、センターの受け持ち人口等、センター及び研究協力者の特性の偏りを極力防ぐように配慮した。研究協力機関は、研究者らの実践・研究ネットワークを活用し、選定条件に即した5機関の紹介を得、倫理的配慮をもとにセンター長及び初任期看護職の同意を得られた3機関とした。

### 2. 指標の試用方法

初任期看護職に、指標を2ヶ月間、虐待事例への対応及び虐待を発見する可能性がある相談業務や事例検討会等で試用するように依頼した。試用に際し、指標開発の目的、各項目の意味、試用場面や試用方法をイメージできることが重要と考え、指標の構成及び試用方法を記述したガイドブックを作成した。ガイドブックを用いてそれらを説明し、理解困難な項目の有無を確認した。初任期看護職に、2週間に1度、自らの行動を振り返り、記録用紙に実施した項目をチェックし、支援の過不足等の気づきを記録するように依頼した。

### 3. データ収集方法

指標の試用開始時、各研究協力者の基本属性及び虐待対応状況について面接調査を行った。試用開始概ね2週間と6週間の計2回、センター長が指定した日時、方法で、試用による高齢者や養護者等への不利益や初任期看護職に負担が生じていないかを確認した。2ヶ月の試用後、試用期間中の初任期看護職の記録を参考にしながら、初任期看護職とセンター長を一緒に半構造化面接調査を行い、指標による気づきや支援の過程で活用した指標の該当項目を確認した。それぞれの了解を得て録音し、逐語録を作成した。

### 4. 分析方法

逐語録をデータ源とし、各センターの個別分析を行い、ついで、個別分析の結果をもとに全体分析を行った。

個別分析では、有用とは役に立つことであることから、「指標は、法の理念に基づく支援に向けて虐待対応の行動の改善を促したか」を把握した。逐語録から、「わかった」「できるようになった」等の文言を手掛かりに有用性を示す部分を、文脈がわかるように抽出し要約した。要約は、①役割の理解及び支援の手掛かりの獲得、②自己の支援の課題認識と課題解決に向けた取り組

み、の視点別に示した。実際の行動に結びつかなかった場合でも、とるべき行動についての語りは、次の支援に活かす知識の獲得及び意思の表出と判断し、データとした。

一方、実用とはセンターの日常業務において用いることであることから、「センターの虐待対応において初任期看護職一人で過剰な負担がなく、継続的に活用しうるか」を把握した。逐語録から「活用できた」、「今後も活用したい」等の文言を手掛かりに、活用方法について文脈がわかるように抽出し要約した。要約は、①初任期看護職一人で過剰な負担がなく活用しうる可能性、②活用方法、活用継続の意向と今後の活用可能性、の視点別に示した。

全体分析では、各センターの個別分析結果の共通性及び個別性をもとに、虐待対応体制等が異なるセンターで、本指標が虐待対応をどのように改善したか（有用性）、どのように活用したか（実用可能性）について明示した。

## 5. 倫理的配慮

千葉大学大学院看護学研究科倫理審査委員会の承認（承認番号28-3）を得たのち実施した。研究協力者に研究目的、調査内容、自由意思による研究への参加及び途中辞退の保証、個人情報保護、結果の公表等について、文書と口頭で説明し、同意書を得た。

## IV. 結果

### 1. 研究協力者の概要

研究協力者と所属センターの概要を表2に示した。以下、センター名を示す英字A・B・Cのあとに初任期看

護職はNを、センター長はCを付し、センターAの初任期看護職はAN、センター長はACのように記載した。

センターA（委託）は看護職を複数配置し、虐待対応は職種に関係なく行っていた。ANは、病院で看護師を経験し、保健師の資格取得後2ヶ月で虐待対応経験も2ヶ月であった。ACは、看護師の資格を有していた。

センターB（委託）は看護職BN1人配置で、虐待対応は主に社会福祉士が行っていた。BNは、病院で看護師を経験し、虐待対応経験2年7ヶ月であった。BCは、主任介護支援専門員・社会福祉士の資格を有していた。

センターC（直営）は保健師を複数配置し、虐待対応は保健師または主任介護支援専門員が行っていた。また、保健師の教育プログラムを有していた。CNは、病院で助産師を経験し、虐待対応経験10ヶ月であった。CCは、社会福祉主事の資格を有していた。業務の都合上、試用後の調査が実施できなかった。

### 2. 各センターにおける有用性と実用可能性

要約を「・」の後に示し、続いて山口らの訪問看護ステーション管理者の経営管理行動指標に関する検証<sup>14)</sup>を参考に、活用した指標の項目と認識・行動への影響の関係性がより明快で代表的な語りを斜体で“ ”に示し、番号を付記した。語りの文脈がわかるように（ ）内に研究者が補足し、語られた指標の項目は、指標項目に付記した番号で記載した。また、要約したデータ数を表3に、「支援行動例」を活用した指標項目は抜粋して表4に示した。

試用期間中、すべてのセンターにおいて高齢者等への不利益や初任期看護職に負担は生じていなかった。

表2 研究協力者が所属するセンター及び研究協力者の概要

	センターA	センターB	センターC
センターの概要			
設置母体	医療法人（委託）	社会福祉法人（委託）	市町村（直営）
受け持ち人口（高齢化率）*	約3万人（24.3%）	約2.5万人（26.9%）	約11万人（17.1%）
虐待対応の主担当	決まっていない	社会福祉士	保健師または主任介護支援専門員
看護職の教育プログラム	なし	なし	あり
職員配置			
看護職	3（看護師2・保健師1）	1（看護師1）	3（保健師3）
社会福祉職	2（社会福祉士2）	1（社会福祉士1）	1（社会福祉主事1）
主任介護支援専門員	1	1	2
研究協力者：看護職の属性			
資格	保健師	看護師	保健師
年代	30代・女性	20代・女性	30代・女性
センター・虐待対応経験	2ヶ月	2年7ヶ月	10ヶ月
センター以外の経験	病院 7年	病院 5年	病院 6年
研究協力者：センター長の属性			
資格	看護師・主任介護支援専門員	主任介護支援専門員・社会福祉士	社会福祉主事
年代・性別	40代・女性	50代・男性	60代・男性

\* 研究時点（平成28年4月1日現在）

表3 センター別有用性及び実用可能性に関し要約したデータ数

検証の項目	研究協力機関		
	センター A	センター B	センター C
有用性			
①役割の理解及び支援の手掛かりの獲得	6	4	4
②自己の支援の課題認識と課題解決に向けた取り組み	4	2	3
実用可能性			
①初任期看護職一人で過剰な負担がなく活用しうる可能性	5	3	4
②活用方法、活用継続の意向と今後の活用可能性	9	6	5

### 1) センター A

#### <有用性>

##### ①役割の理解及び支援の手掛かりの獲得

・試用前は当該事例の対応に終わっていたが、試用により「常に意識すること」を理解し実践できるようになり、支援者に看護職の専門性を明示したり、今後の支援者との連携関係の維持を意識して支援を試みた。

AN1 “「常に意識すること4」を意識することで「支援行動の意図4-2」のために「支援行動例7・8」をすることができた。そして、「常に意識すること5」を意識することで「支援行動例9」をしたり、「支援行動の意図5-2」を意識して、支援者と一緒に事例対応することで、その事例対応だけでなく今後も連携できるように支援者に声を掛けた。今までは、支援者の連携は、ケアマネジャーにつなぐまでと置いていたけれど、看護師の専門性を示したり、今後も連携できるように働きかけることが役割だとわかった”

・虐待対応でやるべきことがわからなかったが、指標の「新たな家族関係の構築」に向けて、「支援行動例」を参考に、多様な支援対象者に対し働きかけ、最善の支援チームになるための支援を試みた。

AN2 “虐待対応も初めての経験で、虐待対応のやるべきことがわからなかった。(試用して) 今までの支援は、虐待の有無の判断と高齢者と養護者のどちらが加害者で、どちらが被害者かを見極めることの支援であったことに気づいた。(略) 「常に意識すること3」、「支援行動の意図3-1」に示されている家族関係を再構築することを意識して、最善の支援チームになるように高齢者と養護者だけでなく、「支援行動例3・4・6」を参考に家族の意向や支援者の支援方針を確認したり、支援者の強みを伝える等支援を行った。”

・センター長(看護師)は、初任期看護職が指標を活用

することで、多様な支援対象者への働きかけができる、事例の全体像を捉えることができる等の支援内容の変化を認めた。

AC1 “指標を活用するようになって高齢者、養護者に加え、家族や支援者へも偏りなく働きかけ、様々な情報を得たり、高齢者と養護者だけでなく事例の全体像を捉えられるようになった。虐待事例のみならず、事例対応全体の支援内容が変わった。”

##### ②自己の支援の課題認識と課題解決に向けた取り組み

・地域のケア力向上への支援を課題と認識し、「支援行動例」を参考に支援を試みたいとの意欲を示した。

AN3 “「常に意識すること5」はこれらからの課題なので、地域ケア力向上等も意識しながら、これらからも「支援行動例」をみながら行動してみたいと思う。”

#### <実用可能性>

##### ①初任期看護職一人で過剰な負担なく活用しうる可能性

・不利益は生じず、項目も理解でき他者からの支援を要せず負担なく活用できる。

AN4 “特に、不利益はなかった。(略) 虐待対応が初めてでも理解できない項目や、負担はなく活用できた。センター長の支援は必要なかった”

##### ②活用方法、活用継続の意向と今後の活用可能性

・支援を評価しながら、看護職の役割や支援行動を学び、必要な支援行動を確認できる。

AN5 “指標は、支援の全体像を示しているので、試用当初は1日の終わりに指標を活用し支援を評価し、不足している視点や必要な支援を明らかにして、常に意識することや支援行動を学ぶために活用した。(略) 支援の過程においてどのような支援行動が必要かを確認することに活用した。”

・「支援行動例」をもとに、高齢者や養護者以外の支援対象者への支援の手掛かりを得るために活用できる。

AN6 “高齢者と養護者だけでなく家族の意向や支援者の支援方針を確認する等(略) 「支援行動例3・4」を支援の手掛かりを得るために活用した。”

・マニュアルを参考にしながら、「常に意識すること」を確認することで、一貫した支援ができる。

AN7 “虐待のマニュアルの緊急性の判断と判断根拠を参考に、「常に意識すること」を意識しながら支援すると、支援行動がまとまりやすく、一貫した支援ができるように感じた。(略) マニュアルを見る時は、指標の「常に意識すること」を確認した。”

・他の職員の支援行動と「支援行動例」を照らし合わせ「支援行動の意図」を理解したり、支援の意図や支援行動と支援効果の関連を学習するツールとして活用できる。

AN8 “センター職員が事業者や施設、市役所、法律の専門家等と連絡、調整を行っていることを見聞きし、そのことを指標に照らし合わせることで、何を意図し行動しているかを理解することができた。また、家族成員の行動変容が見られた事例では「常に意識すること3」、[支援行動の意図3-1, 3-2]に関する行動が行われていることが確認でき、学習の一つとなった。”

・今後も、自身の支援を評価したり、「常に意識すること」の具現化に向けて、「支援行動例」から支援の手掛かりを得るために継続して活用する。

AN9 “指標が、支援の全体を示しているのので、今後も、指標をみて支援を評価したり、支援の手掛かりを得るために活用する。（「常に意識すること」の一つである）地域のケア力向上等も、意識しながら「支援行動例」をみながら行動してみたいと思う。”

AC2 “(ANに) 支援行動のバリエーションが広がると思うので、支援の振り返り等や手掛かりを得るために活用を継続していく（ことを勧める）。”

## 2) センターB

### 〈有用性〉

#### ①役割の理解及び支援の手掛かりの獲得

・初任期看護職とセンター長（主任介護支援専門員等）は、看護職の役割を高齢者と養護者の健康面からの緊急性の判断と捉えていたが、試用により家族や支援者への支援を行うことと認識した。初任期看護職は、事例検討会で家族の意向を意識することを試みた。

BN1 “高齢者や養護者の健康面から緊急性を判断することが看護師の担当でそれ以外は社会福祉士が担当（と思っていた。）（略）（試用して）看護師も家族や支援者の状況も確認することがわかった。（略）高齢者と養護者の意向は確認するけれど家族の意向は確認してないと思った。（略）「支援行動例3」をみながら、今後少し家族や支援者へも働きかけようと思う。（職場内での）事例（検討）の会議で、家族がどうなっているかを意識するようになった。”

BC1 “社会福祉士にだけに任せず、看護師にもその役割（家族や養護者への支援）があることがわかった。（略）もっと（虐待事例の支援を依頼して）いいことがわかった。”

#### ②自己の支援の課題認識と課題解決に向けた取り組み

・指標の支援対象者別の「支援行動例」と自身の支援を比べ、家族や支援者への支援を課題と認識した。

BN2 “（支援）対象者ごとに「支援行動例」があるので、今までの支援と照らし合わせて、自分は家族や支援者をみていないことがわかった。”

・課題解決に向けた具体的な取り組みの語りはみられなかったが、地域ケア力向上への支援が看護職の役割であることを理解し、課題と認識した。

BN3 “「常に意識すること5」は、包括というより市が中心という感じがあって、数字（虐待相談件数）等も社会福祉士が担当しているが私も必要とわかった。（略）所長が、事例の傾向等をまとめて（所内で）報告していることや、市の会議での報告等も意識しないといけないことがわかった。”

### 〈実用可能性〉

#### ①初任期看護職一人で過剰な負担なく活用しうる可能性

・不利益は生じず項目も理解でき、他者からの支援を要せず、マニュアルより量的にも負担なく活用できる。

BN4 “意識しようとする「支援行動の意図」を確認して、その項目の「支援行動例」を参考にするので、量的には負担はなかった。（略）不利益はなかった。（略）項目がわかりにくいということや（略）支援を受けることもなかった。”

BC2 “マニュアルに比べたら量的に負担がなく、常に見直したりするには便利だと思う。”

#### ②活用方法、活用継続の意向と今後の活用可能性

・支援に必要な「支援行動の意図」を確認し、「支援行動例」から支援の手掛かりを得たり、多様な支援対象者を支援するために「支援行動例」を活用する。

BN5 “（支援する際には）意識しようとする「支援行動の意図」を確認して、その項目の「支援行動例」を参考にする。（略）「支援行動例」を見ながら家族や支援者へも働きかけようと思う。”

・看護職1人配置のセンターに入職間もない虐待対応が初めての看護職が、支援行動や支援行動の目的や意図を理解するための学習ツールとして活用できる。

BN6 “就職した当初、どうしていいかわからない時に指標があったらすごく助かったと思う。（虐待対応の）初心者には、どのような行動があるのかを知るヒントにはなると思う。指標に書かれている行動を、周りの人、社会福祉士等に言われていたから、この指標があれば何をしていいか、わかったと思う。（略）どういう目的、意図で動くかってこともわかる。”

BC3 “看護職に特化した虐待の研修会等がないので、こみみに、看護職が一人配置のセンターでは、看護職が就職した時に学習のツールとして役に立つと思う。”

## 3) センターC

### 〈有用性〉

#### ①役割の理解及び支援の手掛かりの獲得

・的確な判断や危険回避には、家族や支援者等の多様な

視点が必要であることや必要な支援行動を認識した。

CN1 「常に意識すること1」は、行っているつもりだったが、家族成員、支援者、医師等を巻き込んでやらないといけないって（わかった）。（「支援行動例」は、）家族成員、支援者等（支援）対象者別になっているので、それを手掛かりに行動しないと緊急性（の判断）が違ってくると思う。

## ②自己の支援の課題認識と課題解決に向けた取り組み

・高齢者・養護者・家族各々の思いの確認や、支援者との情報共有及び支援者の力量形成に向けた支援を自己の課題と認識した。

CN2 「訪問に行くと、その場にいる高齢者と養護者に目がいってしまって（略）意識してその場にはいない養護者や家族がどんな風に思っているのか等も把握しないといけないと思うようになった。ケアマネ等から、聞いて確認はするけれど（「支援行動例5」の情報を）共有しすり合わせたり、（「常に意識すること3」の）力量形成するという感じではなかった。」

・地域ケア力向上への支援が課題であることを再認識し、次年度の職場で提供される教育プログラムと照らし合わせ、課題解決の目途を立てた。

CN3 「常に意識すること5」は、保健師として大切なのは理解しているけれど、地区診断は具体的にどうするかはわからない。（就職して）2年目の保健師の課題で、来年、市の教育プログラムに地区診断等があるので取り組むことになると思う。」

## 〈実用可能性〉

### ①初任期看護職一人で過剰な負担なく活用しうる可能性

・不利益は生じず、項目も理解でき他者からの支援を要せず負担なく活用できる。

CN4 「負担はなかった。（略）各項目は、読めば理解できてわからない項目はなかった。（略）上司からの支援もなく指標をみて、（自身の支援を）評価できた。（略）不利益もなかった。」

### ②活用方法、活用継続の意向と今後の活用可能性

・上司等から支援行動を指示された際に「支援行動例」に照らし合わせ、支援の目的を支援理解するために「行動の意図」を活用できる。

CN5 「先輩保健師から、事前の情報のここを確認してきて」と言われたのが「支援行動例1・2」だった。その支援行動は「支援行動の意図2-1」のための行動で、「常に意識すること2」で示している目的を意識することだとわかった。」

・自身の課題解決のために、職場の教育プログラムとともに「支援行動例」を手掛かりにする。

CN6 「自分の課題は、地域ケア力向上に向けた支援だと思う。来年、市の教育プログラムに基づき地区診断等を学びながら、「常に意識すること5」の「支援行動例」を支援の手掛かりとしようと思う。」

表4 研究協力者が活用した支援行動例（一部抜粋）

支援行動の意図	支援対象者	支援行動例	活用した研究協力者
2-1	高齢者 養護者	1. 高齢者が安心して話せるような環境をつくり、高齢者の現状認識や意向を確認する	CN
		2. 高齢者に名前・年齢、生活状況等を尋ね認知機能や判断能力を推測し、高齢者の主訴や意向の妥当性を推測する	CN
	家族 支援者	3. 生活の場で支援者と共に、家族成員から生活歴・日常生活の様子や家族成員の支援ニーズ、サービス利用の意向を確認する	AN・BN
		4. 支援者の現状認識と支援者が必要と考えている高齢者・養護者・家族成員への支援を把握する	AN
2-2	支援者	5. ケアマネジャー、サービス事業者が考える虐待誘因・要因とその根拠を確認し、看護職が推測している虐待誘因・要因とのすり合わせを行う	CN
3-3	家族	6. 家族成員が安心して支援者を受け入れられるように、信頼できる支援者であることを伝える	AN
4-2	関係 機関	7. 多職種多機関の集まりや事例検討会で、看護職及び看護専門職が担える役割を説明する	AN
	支援者	8. 事例対応において、医療や健康に関する相談や調整役割を積極的に担い、看護職及び看護専門職の強みを他職種に示す	AN
5-1	支援者	9. 終結した事例について、支援者と共に事例対応の振り返りを行い、良かった点や今後の改善点を共有する	AN

\*本文中に記載された支援行動例のみ抜粋

## 3. 有用性と実用可能性に関する3センターの全体分析

### ①有用性

初任期看護職は、高齢者や養護者のみを支援対象と捉え他の支援対象者への支援不足に気づき、家族支援や支援者への働きかけの必要性を認識し、支援の手掛かりを得（AN2, BN1, CN1）、「支援行動例」を参考に支援を試みることができた（AN1）。また、全初任期看護職は、地域ケア力向上への支援が看護職の役割であり、支援の必要性を理解し、自己の課題とした（AN3, BN3, CN3）。センター長も看護職が事例の全体像を捉えられた等の変化を認めた（AC1）。したがって、本指標は看護職の役割認識を高め、支援行動の習得を助け、役割遂行するための課題認識を促し、課題解決に向けた手掛かりを提供したことの中から、虐待対応の行動の改善を促したと判断でき、有用性があるといえる。

また、看護職の役割を高齢者や養護者の健康面から緊急性を判断することに限定し三職種が連携していた状況（センター B）において、他職種であるセンター長が看護職の役割を理解し（BC1）、看護職に「虐待事例の支援を依頼してよい」と述べた。したがって、本指標は、虐待対応における看護職の専門性の発揮と役割期待を拡大し、他職種連携の促進に寄与し、虐待対応の改善に有用であると判断した。

## ②実用可能性

支援に必要な「支援行動の意図」を確認し「支援行動例」から支援の手掛かりを得たり（BN5）、他者の支援行動や支援行動の指示を「支援行動例」に照らし合わせ支援の目的を「支援行動の意図」から理解する等（AN8、CN5）、状況に応じて「支援行動の意図」や「支援行動例」を選択し、活用していた。そして、全初任期看護職は、指標の項目を理解し上司等の支援を要さず活用でき（AN4、BN4、CN4）、マニュアルを活用するより負担がなかった（BC2）。

また、虐待対応の経験がない入職直後の看護職にも活用可能（BN6）で、マニュアルと本指標を併用し、支援の一貫性を保持できること（AN7）を確認した。全初任期看護職は、今後も「支援行動例」を参考に課題解決に向けて取り組み自己学習のツールとして活用するとした（AN9、BN5、CN6）。

このように、本指標は直営（センター C）、委託（センター A、B）を問わず、一人配置の看護職（BN）、教育プログラムのない看護職（AN、BN）、入職直後の看護職（AN）でも負担なく、既存のマニュアルと補完しながら活用でき（AN7）、多様なセンターで今後の継続的な活用の意向が示された（AN9、BN5、CN6）ことから、実用可能性があると判断した。

## V. 考 察

本指標は、虐待対応の三職種の役割等が異なる3センターの初任期看護職の虐待対応を改善し、他職種に虐待対応における看護職の役割について理解を促したことから、センターの組織的な虐待対応を改善する有用性があるといえる。一方、初任期看護職は、現行の虐待対応の体制で負担なく活用でき、自身の支援の課題解決に向けての継続意向を示したことから実用可能性があると考える。そこで、今回の結果から、他のセンターの技術不足や困難感を感じ<sup>5) 6)</sup>、専門性の発揮が十分でない<sup>7)</sup>と認識している看護職<sup>7)</sup>の虐待対応の改善を促し、組織的な虐待対応を改善するか、実用可能性があるかに関し考察する。

## 1. 有用性

### 1) 看護職の虐待対応の改善

高齢者の保護においては、虐待の徴候を見逃さず迅速かつ適切に対応することが必要であり、養護者支援においては、養護者の介護負担を軽減し孤立させないための支援が必要である<sup>15)</sup>。そのためには、高齢者や養護者のみならず、他の家族や支援者から情報を収集し、介入時期を見誤らないことや、介護を養護者と支援者で分担するための支援が必要である<sup>16)</sup>と考える。しかし、センターでは、虐待対応における看護職の役割や支援方法について学ぶ研修機会がなく（BC3）、業務量に対し職員が不足<sup>16)</sup>看護職は平均1.5人<sup>17)</sup>と少数の配置である。そのため、虐待対応に関する看護職の役割や支援方法に関する形式知の習得及び実践知を獲得するための観察学習や看護職間の相互支援の機会が少なく、センター内で実践の省察等に関する支援を得にくいと考えられる。

また、マニュアルは多様な支援対象者に向けた支援行動の意図や具体の支援行動の記載が十分とは言えない。初任期看護職は、他の職員の支援行動の指示を「支援行動例」に当てはめ、指標に示された「支援行動の意図」を確認したり（CN5）、支援行動の意図や支援行動と支援効果の関連について学習していた（AN8）。こうした学習行動は、支援行動の意味や意図を概念化し、説明を受けることが困難なセンターの学習支援の状況を反映した行動と考えられる。各々の学習環境において、初任期看護職は指標に示された支援対象者別の「支援行動例」と自身の支援を対比し、高齢者と養護者のみへの支援であったことに気づき、多様な支援対象者に向けて支援する必要性を認識した（AN2、BN1、CN1）。また、支援対象者に必要な支援を「常に意識すること」や「支援行動の意図」から確認し、その上で「支援行動例」をもとに支援の手掛かりを得、虐待対応の行動を改善できた（AN1）。本指標の「常に意識すること」、「支援行動の意図」は、法を具現化するための熟練保健師の支援行動を概念化して意味づけ、「支援行動例」により熟練保健師等の支援行動の知見を広範に示した構成及び内容である<sup>11)</sup>。このような指標の構成及び内容により、自己の経験に加えて、他の看護職や他職種の支援の観察をもとに経験学習を展開する、すなわち虐待対応に関する実践知を獲得するための学習の支援ツールとして有用性がある<sup>11)</sup>と考える。したがって、他のセンターでの技術不足や困難感を感じ、専門性の発揮が十分でない<sup>7)</sup>と認識している看護職の虐待対応の改善においても、本指標は有用である<sup>11)</sup>と考える。

また、センター A、Cは看護職が3人配置されていた

が、何をすべきか分からなかったり（AN2）、確認すべき情報を指示されても、確認の目的、支援行動としての意味は示されていなかった（CN5）。その一因としては、初任期以降の看護職は虐待対応における多様な支援行動の意味を必ずしも認識していない、もしくは言語化できていないことが考えられる。初任期以降の看護職が本指標を活用することで、看護職の支援行動の意味や意図を概念化することが可能となると考えられる。よって、初任期以降の看護職が初任期看護職に概念化した看護職の支援行動の意味や意図を的確に説明するための一助となると考える。さらに、初任期以降の看護職も、本指標を活用し支援に対する自己評価を行ない、多様な状況における支援の目的・方法と帰結を想起しながら看護職の役割を再学習し、多様な支援対象への支援の課題を抽出して、改善に取り組みを可能とし、支援行動のバリエーションが広がる（AC2）等の有用性が期待できる。これらのことから、初任期のみならず、様々な経験年数の看護職の虐待対応も改善しようと考える。

## 2) 看護職の役割について他職種の理解の促し

看護職が一人配置で教育プログラムのないセンターの看護職（BN）は、指標を試用することで自身の課題を地域ケア力向上への支援と認識したが、具体的な取り組みは語られなかった。センターBは虐待対応を社会福祉士が中心で行っていた。職場内での看護職への役割期待は、指標で示した役割の遂行を躊躇したり、自己の課題解決に向けた取り組みへの動機づけを弱めることが考えられた。虐待対応は、センターの各職種が専門性を発揮し協働であることが求められている<sup>2)</sup>ことから、看護職が担うべき役割をセンター内で共有することが必要である。マニュアルでは、多職種協働や連携の重要性の記載はあるが、職種の専門性に基づいた役割行動の記載は少ない。本指標は、看護職が「常に意識すること」、すなわち看護職の役割が記されていることから、看護職が自身の役割を認識し、他職種に説明することを助け（AN1）、他職種に看護職の役割の理解を促した（BC2）と考える。

宮本らは、センター保健師の実践に関する先行研究をもとに、センター保健師のコンピテンシーの概念モデルを作成し、【地域包括支援センター三職種間で意見交流しやすい雰囲気をつくる】【保健師として貢献できる力を高める】ことにより、【高齢者を支える支援者の連携をつなぐ】【個別支援を基盤に地域を巻き込む】等が促進され、帰結としてセンター内のパートナーシップ、協働の向上、等がもたらされることを示した<sup>18)</sup>。したがって、本指標の活用により、看護職が高齢者・養護者に対

する地域の多様な支援者への働きかける等の虐待対応の力量を高め、センター内で看護職の役割を共有することにより、多職種による意見交換や看護職が専門性を発揮することを促し、法が求めるセンターにおける三職種協働による虐待対応を改善すると考える。

## 2. 実用可能性

本指標は、熟練保健師の実践及びマニュアルを含めた先行文献をもとに作成し、専門家会議にて内容妥当性、実行可能性を検証した<sup>11)</sup>。したがって、本指標は主要な支援行動を網羅し、かつ、実行可能な項目であると考えられ、マニュアルと指標の併用を可能とし（AN7）、マニュアルを用いている職場においても戸惑うことが少ないことが予測される。そのことが、初任期看護職が一人で過剰な負担がなく活用できる要因の一つであると考えられる。マニュアルは対応段階ごとに手順を示しているのに対し、本指標は「常に意識すること」等看護職の役割や支援の全体像を示した。そのことが、初任期看護職が支援の振り返りに活用でき（AN5）、マニュアルに比して簡易で負担のない量（BC2）になったと考える。

また、初任期看護職が自身の課題解決に向けて（AN9、BN5、CN6）、「支援行動の意図」と「支援行動例」を選択しながら活用できること（BN5・AN8・CN5）が継続活用を促したと考える。

実践の場に新たなツールを導入する際、従来の実践と整合し大きく改変することなく効果をもたらすことが実用可能性を高めると考える。本指標はマニュアルと整合し、「支援行動の意図」と「支援行動例」をもとに効果的な支援のための考え方や行動を示した。その結果、日頃の業務において活用でき、他のセンターにおいても実用可能性があると考えられる。

## VI. 研究の限界及び今後の課題

本研究では、指標の有用性と実用可能性を看護職の役割認識や支援行動の習得をもとに判断した。今後は、支援対象者の変化を含めて検証する必要がある。

## 謝辞

本研究にご協力いただいた皆様に深謝いたします。

本論文は、千葉大学大学院看護学研究科における博士学位論文を一部加筆修正したものである。

利益相反は存在しない。

## 引用文献

1) 厚生労働省：地域包括支援センター業務マニュアル、



- 10-11, 2005.
- 2) 株式会社三菱総合研究所：地域包括支援センターにおける業務実態に関する調査研究事業報告書, 95, 2015.
  - 3) 厚生労働省 老健局：平成27年度「高齢者虐待の防止, 高齢者の養護者に対する支援等に関する法律に基づく対応状況等に関する調査」の結果及び高齢者虐待の状況等を踏まえた対応の強化について（通知）, 2017.
  - 4) 同上2) 116.
  - 5) 大越扶貴, 田中敦子：援助職が高齢者虐待の対応に困難を感じる要因. 日本在宅ケア学会誌, 13(2), 51-57, 2010.
  - 6) 藤江慎二：高齢者虐待の対応に困難を感じる援助者の認識. 地域包括支援センターの援助者へのアンケート調査をもとに. 高齢者虐待防止研究, 5(1), 1880-1838, 2009.
  - 7) 高崎絹子, 佐々木明子, 大光房枝, 田沼寮子, 高紋子, 大高のぶえ, 田中甲子, 山崎美貴子：地域包括支援センターにおける権利擁護に関する活動：保健師等看護職の機能と役割を中心に, 高齢者虐待防止研究, 7(1)：100-114, 2011.
  - 8) 社団法人日本社会福祉士会：市町村・地域包括支援センター・都道府県のための養護者による高齢者虐待対応の手引き, 2012.
  - 9) 厚生労働省 老健局：市町村・都道府県における高齢者虐待への対応と養護者支援について, 2013.
  - 10) 千葉県：千葉県高齢者虐待対応マニュアル, 2006.
  - 11) 上原たみ子, 吉本照子, 杉田由加里：高齢者虐待に対する地域包括支援センター看護職の支援行動指標の開発, 千葉看護学会会誌, 23(1)：33-42, 2017.
  - 12) 財団法人医療経済研究・社会保険福祉協会：医療経済研究機構：市町村における高齢者虐待防止の標準化のための体制整備状況の関連要因及び支援のあり方の検討報告書, 8, 2011.
  - 13) 公益社団法人日本看護協会：地域包括支援センター及び市区町村主管部門における保健師活動実態調査報告書, 60-66, 2014.
  - 14) 山口絹世, 吉本照子：経営の危機的状況の予防に着目した訪問看護ステーション管理者の経営管理行動指標試案の有用性・実用可能性の検証, 千葉看護学会会誌, 24(2)：75-84, 2019.
  - 15) 上原たみ子, 吉本照子, 杉田由加里：高齢者虐待に対する保健師の支援の意図に関する文献検討, 高齢者虐待防止研究, 10(1)：139-150, 2014.
  - 16) 同上2) 147.
  - 17) 同上2) 118.
  - 18) 宮本美穂, 柳澤理子：地域包括支援センター保健師のコンピテンシー. 日本在宅看護学会誌, 7(1)：242-251, 2018.

VERIFICATION OF THE EFFICIENCY AND FEASIBILITY OF SUPPORT ACTION INDICATOR  
AGAINST ELDER ABUSE AMONG COMMUNITY HEALTH NURSES AT COMMUNITY  
GENERAL SUPPORT CENTERS

Tamiko Uehara <sup>\*1</sup>, Teruko Yoshimoto <sup>\*2</sup>, Yukari Sugita <sup>\*3</sup>, Rie Iino <sup>\*2</sup>

<sup>\*1</sup>: Research Student, Graduate School of Nursing, Chiba University

<sup>\*2</sup>: Graduate School of Nursing, Chiba University

<sup>\*3</sup>: Ministry of Education, Culture, Sports, Science and Technology Higher Education Bureau medical Education Division

KEY WORDS :

elder abuse, community health nurses, action indicator

Purpose: This study aimed to verify the efficiency and feasibility of the Support Action Indicator (Indicator) Against Elder Abuse by Community Health Nurses at Community General Support Centers (Centers).

Methods: Early-career nurses tested the Indicator over two months at three Centers. Semi-structured interviews were conducted to verify the Indicator's efficiency based on improved responses to elder abuse and its feasibility depending on the presence or absence of a sense of responsibility associated with its usage. Evaluations were also obtained by the Centers' directors.

Results: All early-career nurses identified the presence of support for the elderly and caregivers only, and also recognized the necessity of support for a variety of targets and for improvement in community care as themes based on the indices of "support targets."

The director of the center for nurses noted improvements in the nurses' responses to abuse, for instance, encouraging various support targets and grasping the entire picture of a case. The director of the center for other job classes understood the role of nurses who provide support for recipients of nursing care and their families. Also, depending on the situation, all early-career nurses were able to use the indices "intention for supportive action" and "examples of supportive action" unburdened, and indicated that they would continue to use the indices in problem-solving.

Discussion: We found that early-career nurses understood support behaviors and their role as nurses at the Centers, for instance, learning to reach out not only to the elders and caregivers but also to a wide range of supporters. The Indicator is considered feasible and efficient for nurses in obtaining practical knowledge about preventing elder abuse. We concluded that improvements in the abilities of the Centers' nurses and fulfillment of their role will improve the Centers' responses to elder abuse. Furthermore, with a deeper understanding of the role of nursing staff in other occupations, we believe that this Indicator is useful for improving the response by nursing staff to elder abuse in the center and the organizational response through collaboration. Additionally, the ability to select and use "intention for supportive action" and "examples of supportive action" was thought to have increased the chances of implementation.